

本文解説

児のそら寝

今は昔、比叡の山に見ありけり。

今となつては昔のことだが、比叡山延暦寺に見がいた。

僧たち、宵のつれづれに、

僧たちが、宵の退屈さに、

「いざ、かおもちひせむ。」と言ひけるを、

この見、心寄せに聞きけり。

さりとして、し出ださむを待ちて

そうかといって、作り上げるのを待つて

寝ざらむもわるかりなむと思ひて、

寝ないのもきつとよくないだろつと思つて、

片方に寄りて、寝たるよしにて、

出で来るを待ちけるに、

すでにし出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

もはや作り上げた様子で、（僧たちが）集まって騒ぎ立てている。

この兎、さだめておどろかさむずらむと、この兎は、きつと（僧たちが自分を）起こそうとするだろうと、

待ちゐたるに、僧の、

「もの申しさぶららはむ。おどろかせたまへ。」

と言いき、うれしとは思へども、

と言うのを、(見は)うれしいとは思う
けれども、

ただ一度にいらへむも、

たった一度で返事をするのも、

待ちけるかともぞ思へんとて、

(起こされるのを)待っていたのかと(僧
たちが)思うと困ると考えて、

いま一声呼ばれていらへむと、

念じて寝たるほどに、

我慢して寝ているうちに、

「や、な起こしたてまつりぞ。

「これこれ、起こし申し上げるな。

をさなき人は、寝入りたまひにけり。」

若い人は、寝入ってしまったよ。」

と言ふ声のしければ、

と言う声がしたので、

あな、わびしと思ひて、

(見は) ああ、困ったと思つて、

いま一度起こせかすと、

思ひ寝に聞けば、ひしひしと、

ただ食ひに食ふ音のしければ、

すべななくて、無期ののちに、

「えい。」といらへたりければ、

僧たち笑ふこと限りなし。